

言語文化教育研究学会第1回研究集会 口頭発表 概要

留学生の就職支援を考えるー元留学生のライフストーリーから

三代純平（武蔵野美術大学）

「アジア人財資金構想」「留学生 30 万人計画」「グローバル人財推進会議」等により、留学生の日本での就職促進が社会的課題となっている。その状況を受け、日本語教育においても、留学生の就職支援が大きな課題となっている。「ビジネス日本語」の教科書も数多く発行され、各大学に「ビジネス日本語」の講座が立ち上げられている。同時に、就職後のビジネス日本語よりも、喫緊の課題は、依然としてハードルの高い留学生の就職活動を支援することだという指摘もあり、留学生対象の就職活動支援講座も整備され始めている。

ただし、現在の留学生の就職支援は、ビジネス日本語を支援し、日本特有の就職活動を「日本文化」として理解し、その先にある日本企業の文化をも「日本文化」と理解することを支援することであると考えられている。ただし、この思考様式は、1990 年代、2000 年代と批判されてきた、「日本語」「日本文化」を本質的なものとして捉える議論の延長に位置付けられる。

現行の本質主義的就職支援とは異なる支援のあり方を考えることが本研究の目的である。応募者は、就職という経験を捉え直すために、4 年にわたって、日本企業に就職した元留学生にライフストーリー・インタビューを行ってきた。本発表では、このライフストーリー調査に基づき、就職活動という経験の意味について考察する。

2 名の中国人元留学生の就職活動の語りを取りあげ、就職活動が、一つの社会参加として経験され、「重要な他者」によって支えられていることを論じる。このことは、スキル重視の就職支援の捉え直しにつながる。一方で、就職活動という経験の中に、「外国人」というアイデンティティを一つの資本としなければならないジレンマがある。このことと言語教育の関係をも批判的に論じる。